

解題

濟北詩話

一卷

虎關禪師 師鍊著

本篇は、濟北集二十卷の第十一卷にして、虎關禪師の著す所なり、禪師名は師鍊、藤原氏、弘安四年生る、京師の人、其白河に濟北庵を創めしに由り、集に名づく、元僧寧一山に建長寺に逢ひ、儒釋古今の書を審詢す、故に最も詩文に長ず、本篇多く唐の李杜王韋を評隲し、宋の林和靖、王安石、楊誠齋、劉後村等に及ぶ、其論ずる所鑿々として、疑に中らざるなし、禪師曾て曰、今時我邦の庸流奔波して宋に入る、是れ國の恥を遺すなり、我れ彼地に航し、以て我國に人あるを知らしめんと、將に海に浮ばんとす、母之を阻るを以て止む、其の後醍醐天皇の信遇を承る、こと尤も厚し、足利高氏書幣を具して之を聘すれども辭して往かず、禪師は、尙ほ元亨釋書三十卷、聚文韻略五卷の著あり、皆禪門の寶典たり。

濟北詩話

虎關禪師 師練著

或曰古者言周公惟作鴟鵂七月二詩孔子不作詩只刪詩而已漢魏以降人情浮矯多作詩矣爾諸予曰不然周公二詩者見于詩者耳竟周公世豈唯二篇而已乎孔子詩雖不見我知其爲詩人矣何者以其刪手也方今世人不能作詩者焉能得刪詩乎若又不作詩之者假有刪其編寧足行世乎今見三百篇爲萬代詩法是知仲尼爲詩人也只其詩不傳世者恐秦火耶周公單二亦秦火也耳不則何管二篇而止乎世實有浮矯而作

或人曰古者言周公惟作鴟鵂七月二詩を作る孔子詩を作らず只だ詩を刪るのみ漢魏以降人情浮矯にして詩を作ると多しと爾りや予曰く然らず周公の二詩は詩に見ゆる者のみ周公の世を竟ふるまで豈に唯だ二篇のみならんや孔子の詩は見えずと雖我其詩人たることを知れり何となれば其の刪手なるを以てなり方今世人詩を作ること能はざる者焉ぞ能く詩を刪ることを得んや若し又詩を作る者にあらざれば假ひ刪ることありとも其の編寧ぞ世に行ふに足らんや今三百篇を見るに萬代の詩法たり是れ仲尼の詩人たることを知るなり只だ其の詩世に傳らざる者は恐らくは秦火か周公の單二も亦秦火のみしからざれば則何ぞ管だ二篇のみならんや世實に浮矯にして而して詩を作る者あり然れども漢魏以來の詩人何ぞ必ずしも浮

詩者矣。然漢魏以來、詩人何必例浮矯耶。學道憂世、匡君救民之志、皆形于緒言矣。傳記又可考焉。浮矯之言、吾不取矣。

趙宋人評詩、貴朴古平淡、賤奇工。豪麗者、爲不盡耳矣。夫詩之爲言也、不必古淡、不必奇工、適理而已。大率、上世淳質、言近朴古、中世以降、情僞見焉。言近奇工、達人君子、隨時諷諭、使復性情、豈朴淡奇工之所拘乎。唯理之適而已。古人朴而不達之者有矣、今人達而不朴之者有矣、何例而以朴工爲升降哉。周公之言朴也、孔子之言工也、二子共聖人也、寧以言之工朴而論聖乎哉。譬之文朴也、易之文工也、寧以文之工朴而論經乎哉。聖人順時立言、齊事垂文、豈朴工云乎。然則詩人

矯に例せんや、道を學び世を憂ひ、君を匡し民を救ふの志、皆緒言に形はる、傳記又考ふべし、浮矯の言、吾れ取らず。

趙宋の人、詩を評して朴古平淡を貴びて、奇工豪麗を賤むは、盡さずと爲すのみ、夫れ詩の言たるや、必ずしも古淡ならず、必ずしも、奇工ならず、理に適するのみ、大率、上世は、淳質にして、言は朴古に近し、中世より以降、情僞見え、言は奇工に近し、達人君子、時に隨ひて諷諭して、性情に復らしむ、豈に朴淡奇工に拘る所ならんや、唯だ理に適するのみ、古人朴にして而して達せざる者あり、今人達にして而して朴ならざる者あり、何ぞ例して而して朴工を以て升降を爲さんや、周公の言は朴なり、孔子の言は工なり、二子は共に聖人なり、寧ぞ言の工朴を以て而して聖を論ぜんや、善の文は朴なり、易の文は工なり、寧ぞ文の工朴を以て而して經を論ぜんや、聖人時に順ひて言を立て、事に應じて文を垂る、豈に朴工をしも云はんや、然らば則ち詩人の評は、理に合はざるか。

之評、不台于理乎。

詩貴熟語、賤生語、而上才之者、時或用生語、句意豪奇、下才慣之、冗陋甚。

詩賦以格律高大爲上、漢唐諸子皆是也、俗子不知、只以誇大句語爲佳、寔可笑也、若務句語之人、不顧格律、則大言詩之比也、大言詩者、昔楚王與宋玉輩、戲爲此體、爾來相承、或當優場之歡嬉、蓋詩文一戲也耳、豈風雅之實語、與優場之戲嘲、竝按耶、近代吾黨、偏頗中、此弊多矣、學者不可不辨矣。

古語、後人或誤用風俗沿襲、而不可改之者多矣、晉書謝安傳曰、公若不起、如蒼生何、蒼生猶言黔黎、故唐李商隱詩曰、可憐夜半虛前席、不問蒼生問鬼神、意與前同、凡唐宋詩

詩は熟語を貴びて生語を賤しむ、而して上才の者は、時に或は生語を用ひ、句意豪奇なり、下才のものは、之れに慣るれば、冗陋甚し。

詩賦は格律高きを以て上と爲す、漢唐の諸子皆是れなり、俗子は知らずして、只だ誇大の句語を以て佳と爲す、寔に笑ふべきなり、若し句語のみを務むるの人、格律を顧みざれば、則ち大言詩の比なり、大言詩とは、昔楚王、宋玉輩と戯れに此の體を爲す、爾來相承け、或は優場の歡嬉に當つ、蓋詩の一戲のみ、豈に風雅の實語と、優場の戲嘲と、竝び按ぜんや、近代吾が黨の偏頗中に、此の弊多し、學者辨せざるべからず。

古語は、後人或は風俗の沿襲を誤用して、而して之れを改むべからざる者多し、晉書謝安傳に曰く、公若し起たざれば蒼生を如何んせん、蒼生とは、猶黔黎と言ふがごとし、故に唐の李商隱の詩に曰く、憐む可し夜半に虚しく席を前め、蒼生を問はずして鬼神を問ふと、意、前と同じ、凡そ唐宋の詩に、蒼生と使ふ者は、皆是れなり、予按

人、使蒼生者、皆是也。予按、虞書曰、禹曰、兪哉、帝光天之下、至海隅蒼生、孔氏傳曰、蒼蒼然生草木、夫蒼生之言、先是未聞、然後賢、良經何乎、若又後賢棄安國而別有旨耶。

或問、陶淵明爲詩人之宗、實諸曰、爾盡善盡美乎、曰、未也、其事若何、曰、詩格萬端、陶氏只長沖澹而已、豈盡美哉、蓋文辭施于野旅窮寒者、易、數于官閣富盛者、難、元亮者、衰晉之介士也、故其詩、清淡朴質、只爲長一格也、不可言全才矣、又、元亮之行、吾猶有議焉、爲彭澤令、纔數十日而去、是爲傲吏、豈大賢之舉乎、何也、東晉之末、朝政顛覆、況僻縣乎、其官更可測矣、元亮寧不先識哉、不受印已、受、則令彭澤民見仁風於已絕、聞德教於久亡、豈

するに、虞書に曰く、禹曰く、兪るかな帝天の下に光り、海隅の蒼生に至る、孔氏傳に曰く、蒼蒼然として草木を生ず、夫れ蒼生の言、是れより先き、未だ聞かず、然るに、後賢經に戻るは何ぞや、若しくは、又後賢、安國を棄て、而して別に旨あるか。

或人問ふ、陶淵明は、詩人の宗と爲すと、實なりや、曰く、兩り、善を盡し美を盡せりや、曰く、未だし、其の事若何ん、曰く、詩格は萬端なり、陶氏は只だ沖澹に長するのみ、豈に美を盡さんや、蓋文辭は、野旅窮寒に施すは易く、官閣富盛に敷くは難し、元亮は衰晉の介士なり、故に其の詩、清淡朴質、只だ一格に長すと爲すなり、全才と言ふべからず、又、元亮の行、吾れ猶議することあり、彭澤の令と爲り、纔に數十日にして去る、是れ傲吏たり、豈に大賢の舉ならんや、何となれば、東晉の末、朝政顛覆す、況んや僻縣をや、其の官吏たる、測るべし、元亮寧ぞ先に識らざらんや、印を受けざれば已む、受くれば、則ち彭澤の民をして、仁風を已絶に見、德教を久亡に聞かしめば、豈に偉ならずや、夫れ一縣清くして而して一郡學び、一郡學びて、而して一國教へ易し、何ぞ天下四海、化に漸せざることを知

不偉乎哉、夫一縣清而一郡學焉、一郡學而一國易教焉、何知天下四海不漸于化乎、不思此、而挾其傲狹、區區較人品之崇卑、藐年齒之多寡、俄爾而去、其智懷可見矣、後世聞遺者鮮矣、卻以俄去爲元亮之高、不充一莖矣、若言小縣不足爲政者非也、宓子之在單父也、託五紘而致和焉、滕文公之行仁也、來陳相於楚矣、七國之時、滕爲小國、魯國之內、單父爲僻縣、然而大賢之爲政也、不言小矣、況孔子爲委吏矣、爲乘田矣、會計當而已、牛羊遂而已、潛也、何不復邪、潛之衰也、爲政者易矣、蓋渴人易爲飲也、我恐元亮善於斯、自一彭澤、推而上、于朝者、寧有卯金之篡乎、夫守潔於身者易矣、行和於邦者難矣、潛也可

濟北詩話

らんや、此れを思はずして而して其の傲狹を挟み、區々として人品の崇卑を較べ、年齒の多寡を藐ひ、俄爾として去る、其の胸懷見るべし、後世道を聞く者鮮し、卻つて俄に去るを以て、元亮の高と爲す、一莖にだも充らず、若し小縣は政を爲すに足らずと言はゞ、非なり、宓子の單父に在るや、五紘に託して而して和を致す、滕の文公の仁を行ふや、陳相を楚より來せり、七國の時、滕は小國たり、魯國の内、單父は僻縣たり、然り而して大賢の政を爲すや、小を言はず、況んや孔子は委吏と爲り、乘田と爲れり、會計當りて已む、牛羊遂げて已む、潛や何ぞ復せざるや、言の衰ふるや、政を爲すこと易し、蓋渴人には飲を爲さしめ易ければなり、我恐らくは、元亮斯に善くし、一彭澤より、推して朝に上らば、寧ぞ卯金の篡有らんや、夫れ潔を身に守るは易く、和を邦に行ふは難し、潛は介潔、沖朴の士と謂ふべし、大賢に非ず、其の詩は、其の人の如し、先輩の潛を稱するは、行に於ては介を貴び、詩に於ては淡を貴ぶ、後學委せずして、語に隨ひてして轉じて以て全才と爲すなり、故に我れ詳に行事を考へて詩に合すと云ふ。

五

謂介潔冲朴之士非大賢矣其詩如其人先輩之稱潛也於行貴介於詩貴淡後學不委隨語而轉以爲全才也故我詳考行事合于詩云。

玉屑集句豪畔理者以石敏若冰柱懸簷一千丈與李白白髮三千丈之句竝按予謂不然李詩曰白髮三千丈緣愁若箇長蓋白髮生愁裏人有愁也天地不能容之者有矣若許緣愁三千丈猶爲短焉翰林措意極其妙也豈比敏若之無當玉卮乎。

李白送賀賓客詩云山陰道士如相見應寫黃庭換白鵝又王右軍云掃素寫道經筆精妙入神書罷籠鵝去何曾別主人按右軍傳寫道德經換鵝不寫黃庭經也白鵝能記事

玉屑集に句豪にして理に畔く者は石敏若の冰柱簷に懸つて一千丈と李白の「白髮三千丈」の句とを以て竝び按ず予謂へらく然らず李の詩に曰く白髮三千丈愁に緣つて箇の若く長しと蓋白髮は愁裏に生ず人愁あるときは天地も之れを容るゝこと能はざる者あり若し愁に緣ると許さば三千丈猶短しと爲す翰林意を措く其の妙を極めたり豈に敏若の當無き玉卮に比せんや。

李白の賀賓客を送る詩に山陰の道士如し相見ば應に黃庭を寫して白鵝に換ふべし又王右軍に云と素を掃ふて道經を寫し筆精妙神に入る書し罷んで鵝を籠にして去る何ぞ曾て主人に別れん按ずるに右軍の傳に道德經を寫して鵝に換ふと黃庭經を寫すにあらざ

先時偶忘邪、雪竇送文政、偈云、因笑仲尼、溫伯雪、傾蓋同途、不同、轍仲尼伯雪、目擊道存、仲尼程子、傾蓋而語、明覺之傾蓋者、謫仙之黃庭乎。

杜詩吳楚東南坼、乾坤日夜浮、注者云、洞庭在乾坤之內、其水日夜浮也、予謂此箋非也、蓋言洞庭之闊、好浮乾坤也、如注意、此句不活、客曰、萬境皆天地內物也、洞庭若浮天地、湖在何處、曰、不然、詩人造語、此類不鮮、王維漢江詩曰、江流天地外、山色有無中、如子言、漢江出天地外、流何所邪、客不對。

杜詩題己上人茅齋者、注者曰、歐陽脩云、僧齊己也、古本、系開元二十九年、新本、系天寶十二載、皆非也、夫齊己者、唐末人、爲鄭谷詩

るなり、白能く事を記すと雖ども、先時偶、忘れしか、雪竇の文政を送る偈に云ふ、因りて笑ふ仲尼と溫伯雪と、蓋を傾けて途を同じうして轍を同じうせず、仲尼と伯雪と目撃して道存す、仲尼と程子と、蓋を傾けて語る、明覺の傾蓋は、謫仙の黃庭か。

杜の詩に「吳楚東南に坼け、乾坤日夜に浮ぶ」、注者云ふ、洞庭は乾坤の内に在り、其の水日夜浮ぶなり、予謂へらく、此の箋非なり、蓋し言ふ、洞庭の闊なる、乾坤を浮ぶに好し、注の意の如くならば、此の句活きず、客曰く、萬境は皆天地内の物なり、洞庭若し天地を浮べば、湖、何れの處にか在る、曰く、然らず、詩人の造語、此の類辭からず、王維の漢江の詩に曰く、江流天地の外、山色有無の中、子の言の如きは、漢江天地の外に出でず、何れの所に流るゝやと、客對へず。

杜が詩の己上人の茅齋に題する者、注者曰く、歐陽脩云ふ、僧齊己なりと、古本には、開元二十九年に系く、新本には、天寶十二載に系く、皆非なり、夫れ齊己は、唐末の人に於て、鄭谷の詩友たり、謂ふに、神月齊己ならん、二人共に

友謂禪月齊已也、二人共參遊仰山石霜會下禪書中、往往而見焉、去老杜殆百歲、況諸家詩中、不言齊已長壽乎、注者、假言於六一也、六一高才、恐非出其口矣、茅齋已上人、上字決不齊耳。

老杜別贊上人詩、楊枝屢在手、豆子兩已熟、諸注皆非、只希白引梵網經注、上句楊枝不及、下句豆子、蓋此豆非青豆也、溲豆也、梵網十八種中一也、蓋此二句、褒贊公精頭陀、諸氏以青豆解之、可笑、而希白偶引梵網至上句不及、下句詩思精蘊可見、餘此言之、千家之人、上杜壇者鮮乎。

老杜夔府詠懷云、身許雙峰寺、門求七祖禪、注者以七佛爲七祖、可笑也、儒人不見佛書、

仰山石霜の會下に參遊す、禪書の中、往々にして見ゆ、老杜を去ること殆んど百歲、況んや諸家の詩中に、齊己の長壽を言はざるをや、注者、言を六一に假るなり、六一の高才、恐らくは其の口より出づるに非ず、茅齋已上人の上字、決して齊ならざるのみ。

老杜の贊上人に別るゝ詩に、楊枝屢に手に在り、豆子兩已に熟す、諸注皆非なり、只だ希白は、梵網經を引きて、上句の楊枝を注して、下句の豆子に及ばず、蓋し此の豆は青豆に非ず、溲豆なり、梵網十八種中の一なり、蓋し此の二句、贊公の頭陀に精しきことを褒す、諸氏青豆を以て之れを解す、笑ふべし、而して希白、偶、梵網を引きて、上句に至りて、下句に及ばず、詩思の精蘊見るべし、此れに繇りて之れを言へば、千家の人、杜壇に上る者鮮きか。

老杜の夔府詠懷に云ふ、身は許す雙峰寺、門は求む七祖の禪、注者七佛を以て七祖と爲すは、笑ふべきなり、儒人の佛書を見ず、間、見ることあれども、精しからず、故に斯の

圖有見不精故有斯惑凡注解之家雖便本書至有違錯不啻感後學卻齎先賢可不慎哉蓋吾門有七祖事者出北宗也神秀之嗣有普寂居嵩山煽化於長安洛都二宗士庶多歸焉因是立神秀爲六祖自稱七祖曹溪門人荷澤神會禪師白官辨之爾後北宗祖號不立焉所謂神會磨普寂碑也開元天寶之間卿大夫之欽豔普寂者多矣工部生此時順時所趨疑見普寂門人乎又貞元中荷澤受七祖諡此事工部死而久矣今詳詩義雖定曹溪宗趣猶旁聞嵩山旨是亦工部遍參之意也

唐初盛唐之詩人有贈答只和意而已不和韻矣和意者買至早朝大明宮詩杜甫王維

濟北詩話

惑あり凡そ注解の家本書に便すと雖ども違錯あるに至りては嘗に後學を惑すのみならず卻つて先賢を蓋す慎まざるべけんや蓋し吾が門に七祖の事あるは北宗に出づるなり神秀の嗣に普寂といふものあり嵩山に居りて化を長安洛陽の二京に煽す士庶多く歸す是れに因りて神秀を立て六祖と爲し自ら七祖と稱す曹溪の門人荷澤神會禪師官に白して之れを辨す爾後北宗の祖號立たず謂はゆる神會曾て普寂の碑を磨するなり開元天寶の間卿大夫の普寂に欽豔する者多し工部此の時に生れて時の趨く所に順ひて疑ふらくは普寂の門人を見しか又貞元中に荷澤七祖の諡を受く此の事工部死して而して久し今詩の義を詳にするに曹溪の宗趣を定むと雖ども猶旁に嵩山の旨を聞く是れ亦工部遍參の意なり

唐の初め盛唐の詩人の贈答あるは只だ意に和するのみ韻に和せず意に和するは買至の早に大明宮に朝する詩に杜甫王維岑參皆和あり至の落句に云ふ共に

九

岑參皆有和、至落句云、共沐恩波、鳳池裏、朝
 朝染翰侍君王、甫落句云、欲知世掌絲綸美、
 池上于今有鳳毛、維落句云、朝罷須裁五色
 詔、佩聲歸到鳳池頭、岑落句云、獨有鳳皇池
 上客、陽春一曲和皆難、蓋至之父會、開元間、
 掌制誥、肅宗拜至起居舍人、起居舍人掌制
 誥、故至句有染翰侍君王之語、甫之世、掌絲
 綸美者、曾至父子、玄肅兩朝、盛典之謂矣、維
 之五色詔、又同、四詩皆有鳳池者、舍人局前
 有鳳皇池也、落句者、寓意之所、四人句同者、
 和意之謂也、和韻者、詩話曰、始于元白、方今
 元白之集、和韻多焉、晚唐詩人、多效之、至趙
 宋、天下雷同、凡有贈寄、無不和韻矣、予考古
 集、元白之前、有和韻者、李端病中寄盧綸詩

恩波に沐す鳳池の裏、朝々翰を染めて君王に侍す、甫の
 落句に云ふ世、絲綸の美を掌ることを知らんと欲す、池上
 今に鳳毛有り、維の落句に云ふ、朝罷んで須らく裁すべ
 し五色の詔、佩聲歸り到的る鳳池の頭、岑の落句に云ふ、獨
 り鳳皇池上の客のみ有りて、陽春の一曲和皆難しと、蓋
 し至の父會は、開元の間、制誥を掌る、肅宗拜して起居舍
 人に至る、起居舍人は制誥を掌る、故に至の句に、翰を染
 めて君王に侍する、の語あり、甫の世、絲綸の美を掌る
 といふは、曾至父子、玄肅の兩朝、盛典の謂なり、維の五色
 の詔も又同じ、四詩皆鳳池あるは、舍人の局前に鳳皇池
 あるなり、落句は寓意の所、四人の句同じきは、意に和す
 るの謂なり、韻に和するは、詩話に曰く、元白に始ると、方
 今元白の集に、和韻多し、晚唐の詩人多く之れに效ふ、趙
 宋に至りて、天下雷同す、凡そ贈寄あれば韻に和せずと
 いふと無し乎、古集を考ふるに、元白の前に和韻あるは、
 李端の病中に盧綸に寄する詩に云ふ、青々たる麥隴白雲
 の陰、古寺人無く春草深し、乳燕泥を拾ふて、古井に依り、
 鳴鳩羽を拂ふて花林を歴、千年の駸藪山履明か、萬尺の
 垂藤水心に入る、一たび漳濱に臥して、今老いと欲す、
 誰か知らん才子忽ち相尋ねんことを綸、和して云ふ、野

云、青青麥隴白雲陰、古寺無人春草深、乳燕拾泥依古井、鳴鳩拂羽歷花林、千年駁磬明山履、萬尺垂藤入水心、一臥漳濱今欲老、誰知才子忽相尋、綸和云、野寺昏鐘山正陰、亂藤高竹水聲深、田夫就餉還依草、野雉驚飛不過林、齋沐暫思同靜室、清羸已覺助禪心、寂寞日長誰問疾、料君惟取古方尋、是和之押韻者也、李盧先元白者遠矣、蓋端綸代宗朝有詩名、世號大曆十才子、所謂吉中孚、韓翃、錢起、司空曙、苗發、崔顥、耿諱、夏侯審、及端綸也、端落句才子者、此之謂矣、元白詩名、在憲宗之元和、穆宗之長慶間、大曆去元和殆五十年、因此而言、和韻不始元白、予熟思之、盛唐詩人、已有和韻、至元白而益繁耳矣、

濟北詩話

寺の昏鐘山正に陰る、亂藤高竹水聲深し、田夫餉に就いて還て草に依る、野雉驚き飛んで林を過ぎず、齋沐暫く思ふ靜室を向うせんことを、清羸已に覺ふ禪心を助くるを、寂寞日長く誰か疾を問はん、料るに君が惟だ古方を取つて尋ねんことを、是れ和の押韻せる者なり、李盧は元白に先つこと遠し、蓋端綸は、代宗の朝に詩名あり、世に大曆の十才子と號す、謂はゆる吉中孚、韓翃、錢起、司空曙、苗發、崔顥、耿諱、夏侯審、及び端綸なり、端の落句の才子と云ふ者は、此れを謂ふなり、元白の詩名、憲宗の元和、穆宗の長慶の間に在り、大曆は元和を去ること、殆んど五十年、此れに因りて、而して言へば、和韻は元白に始るにあらず、予之れを熟思するに、盛唐の詩人、已に和韻あり、元白に至りて、而して益繁きのみ、

唐玄宗世稱賢主予謂只是豪奢之君也兼
 謂子知人矣其所厚者婦女戲樂其所薄者
 文才官職也開元之間東宮官僚清冷薛令
 之爲右庶子題詩于壁曰朝日上團圓照見
 先生盤盤中何所有首着長闌干飯盞匙難
 縮羹稀節易寬無以謀朝夕何由保歲寒明
 皇行東宮見之書其榜曰啄木鶮距長鳳皇
 毛羽短若嫌松桂寒任逐桑榆暖依此令之
 謝病歸唐史云開元時米斗五錢國家富贍
 然東宮官僚何冷至此邪有司不暇恤乎明
 皇若或聞之須大驚督譴儻自見盍斥有司
 勸僚屬而徒賦閑詩聽謝歸乎又王維侍金
 鑾殿孟浩然潛往商較風雅玄宗忽幸維所
 浩然錯愕伏牀下維不敢隱明皇欣然曰素

唐の玄宗は世に賢主と稱す予謂へらく只だ是れ豪奢
 の君なり兼て人を知るに暗し其の厚くする所の者は
 婦々戲樂其の薄くする所の者は文才官職なり開元の
 間東宮の官僚清冷なり薛令之右庶子と爲り詩を壁
 に題して曰く朝日上つて團々照し見る先生の盤盤中
 何の有る所ぞ首着長じて闌干飯盞つて匙縮し難く羹
 稀にして筋寬し易し以て朝夕を謀る無し何に由つて
 か歲寒を保たん」と明皇東宮に行きて之れを見其の傍
 に書して曰く啄木鶮距長し鳳皇毛羽短し若し松桂の
 寒を嫌はゞ桑榆の暖を逐ふに任す此れに依りて令之
 病と謝して歸る唐史に云ふ開元の時米斗に五錢國家
 富贍なりと然れども東宮の官僚何ぞ冷して此に至る
 や有司恤むに暇あらざるか明皇若し或は之れを聞か
 ば須らく大に驚きて督譴すべし儻し自ら見れば盍ぞ
 有司を斥けて僚屬を勵さざる而して徒に閑詩を賦して
 謝歸するに聽すや又王維金鑾殿に侍す孟浩然潛に往
 きて風雅を商較す玄宗忽ち維の所に幸す浩然錯愕し
 て牀下に伏す維敢て隱さず明皇欣然として曰く素よ
 り其の人を聞けりと因りて召し見るとを得たり詔し
 て詩を念せしむ北闕上書を休む南山舊園に歸る不才

聞其人、因得召見、詔念詩、北闕休上書、南山歸、舊聞不才明主棄、多病故人疏、明皇憮然曰、朕未曾棄人、自是卿不求進、奈何有此作、因命歸終南山、因此而言、玄宗非不替愛才、又不知詩矣、蓋不才明主棄者、自責之句也、夫士之負才也、不待進而承認者有之、待進而承認者有之、不待進而承認者、上才也、待進而承認者、中才也、浩然以中才望上才、故託句而自責、言上才者、不待進而有詔、浩然未奉詔、是爲明主所棄也、明皇少詩思、卻答浩然、可笑、然玄宗自言、素聞其人、其才可測、不細思詩句、卻疏之、何乎、又李白進清平調三詩、眷遇尤渥、而高力士以靴怨譖、妃子依之見黜、嗟乎、玄宗之不養才者多矣、昏于知

濟北詩話

明主棄つ、多病故人疏んず、と、明皇憮然として曰く、朕未だ會て人を棄てず、自らは是れ卿進むを求めず、奈何ぞ此の作有るやと、因りて命じて終南山に歸らしむ、此れに因りて而して言へば、玄宗嘗に才を愛せざるのみならず、又詩を知らざるなり、蓋し、不才明主棄つ」とは、自ら責むるの句なり、夫れ士の才を負ふや、進むことを待たずして而して詔を承くる者之れ有り、進むことを待ちて而して詔を承くる者之れ有り、進むことを待たずして而して詔を承くる者は、上才なり、進むことを待ちて而して詔を承くる者は、中才なり、浩然中才を以て上才を望む、故に句に託して而して自ら責む、言ふは上才は、進むことを待たずして而して詔あり、浩然未だ詔を奉せず、是れ明主に棄てらるゝなり、明皇、詩思少くして、卻つて浩然を咎む、笑ふべし、然れども、玄宗自ら言ふ、素とより其の人を聞くと、其の才測るべし、細に詩句を思はず、卻つて之れを疏んずるは何ぞや、又、李白、清平調の三詩を進む、眷遇尤も渥し、而して高力士、靴の怨みを以て妃子に譖す、之れに依りて黜けらる、嗟乎、玄宗の才を養はざる者多し、人を知るに昏きか、沈香亭を建て、妃子を賞し、梨花園を營みて、姪樂を縱にす、鬪雞舞馬の費、其の

人乎、建沈香亭、賞妃子、營梨花園、縱姪樂、鬪
 鷄、舞馬之費、其侈靡不可言矣、何厚彼而薄
 此乎、只其開元之盛也、姚宋之功也、及李林
 甫爲相、敗國盡賢、無所不至、晚年語高力士
 曰、海內無事、朕將吐納導引、以天下事付林
 甫、迷而不反者乎、

韋蘇州集有雪中聞李儋過門不訪詩云、度
 門誰不訪、冒雪屢西東、已想人如玉、遙憐馬
 似騃、乍迷金谷路、稍變上陽宮、還比相思意、
 紛紛正滿空、夫常人賦詩也、著意於領頭二
 聯、而緩初後、以故讀至終篇、少味矣、今此落
 句、借雪態度、而寄心焉、句法妙麗、意思高大、
 可爲百世之範模也、

予愛退之聯句句意雄奇、而毛遜岑出寸碧

修辭言ふべからず、何ぞ彼に厚くして而して此れに薄き
 や、只だ其の開元の盛なりしは、姚宋の功なり、李林甫、相
 と爲るに及び、國を敗り賢を盡し、至らざる所無し、晚年
 に高力士に語りて曰く、海内無事、朕將に吐納導引せん
 とすと、天下の事を以て林甫に付す、迷ひて而して反ら
 ざる者か、

韋蘇州集に雪中に李儋が門を過ぎて訪はずと聞くの
 詩あり云く、門を度りて能く訪はず、雪を冒して屢、西東、
 已に想ふ人玉の如し、遙に憐む馬騃に似たり、乍ち迷子
 金谷の路、稍、變ず上陽宮、還て相思の意に比す、紛々とし
 て正に空に滿つ、夫れ常人の詩を賦するや、意を領頭の
 二聯に著けて、而して初後を緩にす、故を以て、讀みて
 終篇に至りて味少し、今此の落句、雪の態度を借りて、而
 して心を寄す、句法妙麗にして、意思高大なり、百世の範
 模と爲すべし、

予、退之の聯句の句意の雄奇なるを愛す、而して、毛遜岑寸

遠目増雙明、以爲後句不及前句、後見謝逸詩、忽逢隔水一山碧、不覺舉頭雙眼明、始知韓聯、圓美渾醇、凡詩人取前輩兩句、並用者、皆無韻、然此謝聯、不覺醜、豈其奪胎乎。

唐宋代、立邊功、多因嬖幸不才之臣也、蓋才者及第得官、不才者雖嬖幸、無由官、故立邊功、取封侯、唐曹松詩云、憑君莫話封侯事、一將功成萬骨枯、宋劉貢父詩云、自古邊功緣底事、多因嬖倖欲封侯、不如直與黃金印、惜取沙場萬鬪讎、今時禪家據大刹者、以邊鄙小院、茅屋三五間者、申官爲定額、竊援假名之徒、差爲住持、或居一夏、或半歲、急廻、本山街、長老西堂之號位、賓主相欺、宗風墜地、不謂唐宋弊政、移在我門中乎、彼假名練若徒、

碧を出す、遠目雙明を増すに至りて、以爲へらく、後句は前句に及ばずと、後に謝逸の詩の「忽逢ふ水を隔て、一山碧なり、覺えず頭を擧げて雙眼明かなり」といふを見て、始めて韓の聯の圓美渾醇なるを知る、凡そ詩人か前輩の兩句を取りて並び用ふる者、皆韻無し、然れども、此の謝の聯は醜を覺えず、豈んど其れ奪胎か。

唐宋の代、邊功を立つるは、多くは嬖幸不才の臣に因るなり、蓋し才者は及第して官を得、不才者は嬖幸と雖ども、官に由ること無し、故に邊功を立て、封侯を取る、唐の曹松の詩に云ふ、君に憑て話すること、莫れ封侯の事、一將功成つて萬骨枯る、宋の劉貢父の詩に云ふ、古より邊功底事に緣る、多くは嬖倖の封侯たらんと欲するに因る、如かず直に黄金の印を與へ、惜取せん沙場の萬鬪讎と、今時、禪家の大刹に據る者、邊鄙の小院、茅屋三五間なる者を以て、官に申して定額と爲す、竊援假名の徒、差して住持と爲す、或は居ること一夏、或は半歲、急に本山に廻りて、長老西堂の號位を街ふ、賓主相欺き、宗風地に墜つ、謂はざりき、唐宋の弊政移りて、我が門中に在らんとは、彼の假名練若の徒、邊利に在りて、掠虚説話、狂妄伎倆、淨信を勾引して、邪途に陥没す、此の輩、賓字に益てり、吾

在邊剝、掠虛說話、狂妄伎倆、勾引淨信、陷沒邪途、此輩益寰宇、吾末之如何、詩人所歎者、身命而已、我所怕者、性命而已、彼亡一世、此亡曠劫、嗚呼、立邊功者、非變幸之罪也、唐宋帝王之罪矣、立邊號者、非啜羊之罪也、大刹住持之罪矣、詩話、玉局文詠、雪八首、聲色氣味、富貴勢力也、尤爲新奇、然其貴詠曰、海風吹浪去、無邊倏忽、疑爲萬頃田、五月京塵渴、人肺不知價直幾多錢、頗爲小疵、夫貴之義二焉、一品種、二價直、蓋貴之貴、曰品種、非價直也、今此章曰、價直似相乖矣、詩人之被語牽者、往往而在焉、前篇恐亦爾與、戲補正曰、來時正見自雲霄、知是渠儂出處高、至潔形容無點汗、想應天胤補仙曹。

之れを如何んともすることなし、詩人の歎く所の者は、身命のみ、我が怕るゝ所は、性命のみ、彼の亡は一世、此の亡は曠劫、嗚呼、邊功を立つる者は、變幸の罪に非ざるなり、唐宋帝王の罪なり、邊號を立つる者は、啜羊の罪に非ざるなり、大刹住持の罪なり。
詩話に玉局文の雪を詠する八首、聲色氣味、富貴勢力なり、尤も新奇と爲す、然れども、其の貴詠に曰く、海風浪を吹いて無邊に去り、倏忽漂つて萬頃の田と爲る、五月京塵人肺を渴す、知らず價直幾多の錢」と、頗る小疵ありと爲す、夫れ貴の義は二つ、一は品種、二は價直なり、蓋し貴の貴は、品種を曰ふ、價直には非ざるなり、今此の章に曰ふ價直は、相乖くに似たり、詩人の語に牽かるゝ者、往々にして在り、前篇恐らくは亦爾らんか、戲れに補正して曰く、來時正に見る雲霄よりす、知る是れ渠儂出處の高きを、至潔なる形容點汗無し、想ふ應に天胤補仙の曹なるべし。

王梵志詩曰、城外土饅頭、謙草在城裏、每人一箇、莫嫌沒滋味、黃山谷見之曰、已且爲土饅頭、當使誰食之、東坡易後二句曰、預先著酒澆、使教有滋味、圓悟禪師曰、東坡未盡餘興、足成四韻曰、城外土饅頭、謙草在城裏、著群哭相送、入在土皮裏、次第作、謙草相送無窮已、以茲警世人、莫開眼瞌睡、予曰、甚矣哉、風雅之難能乎、三大老皆未到于極矣、蓋梵志者、意到句不到、東坡放而不警矣、圓悟警而不精矣、只涪翁之論亦佳矣、然無句何哉、取梵志之到者、效蘇公之改曰、無常鬼糞糞、箇箇好滋味、又梵志只解警世人而已、吾輩豈受嘲調乎、作一頌曰、林下鐵饅頭、疎皮堅、巨毀、無常鬼齒摧、故號金剛體、此蓋餘興云爾、

濟北詩話

王梵志の詩に曰く、城外の土饅頭、謙草城裏に在り、人毎に一箇を喫す、嫌ふ莫れ滋味沒きを、黃山谷是れを見て曰く、已に且つ土饅頭と爲す、當に誰をして之れを食はしむべきと、東坡、後の二句を易へて曰く、預め先づ酒澆を著し、滋味有らしめんと、圓悟禪師曰く、東坡未だ餘興を盡さずと、足して四韻を成して、曰く、城外の土饅頭、謙草城裏に在り、著群哭相送り、入りて土皮の裏に在り、次第に謙草と作り、相送りて窮已無し、茲を以て世人を警む、眼を開いて瞌睡すること莫れ、予曰く、甚しいかな、風雅の能し難きや、三大老皆未だ極に到らず、蓋し梵志は、意到りて句到らず、東坡は、放にして而して警ならず、圓悟は、警にして而して精ならず、只だ涪翁の論も亦佳なり、然れども、句無きは何ぞや、梵志の到れる者を取りて、蘇公の改に效ひて曰く、無常鬼糞糞、箇々滋味を好む、又梵志は只だ世人を警むることを解するのみ、吾が輩豈に嘲調を受けんや、一頌を作りて曰く、林下の鐵饅頭、疎皮堅くして毀るべからず、無常鬼齒摧く、故に金剛體と號す、此れ蓋し餘興一兩か云ふ。

杭州靈隱山玄順菴主姓錢氏嗣福州支提
 悟禪師始入雁蕩山卓菴復止杭州靈隱山
 共離鴈山有頌云浪宕閑吟下翠微更無一
 法可思惟有入問我出山意藜杖頭挑破衲
 衣歸天竺山有偈云事事無能一不前喜歸
 天竺過殘年飢餐困睡無餘事休說壺中別
 有天又有臨終偈數句廣燈藏之備矣而雲
 臥記談云熙寧間有僧清順往來靈隱天竺
 以偈句同寫閑中趣味曰前云凡雲臥所談
 多正古傳之謬皆如石據然此二偈已收廣
 燈中按瑩所談一字無差豈瑩之所聞之玄
 順與清未皎如乎又前偈離鴈山作後偈歸
 天竺作紀談所載似一時之什若雲臥以二
 偈置天聖前猶或恕焉況熙寧間乎反復二

杭州の靈隱山の玄順菴主姓錢氏福州の支提悟禪師
 に嗣ぎ始め雁蕩山に入り菴を卓す復た杭州の靈隱山
 に止る其の雁山を離るるときに頌有り云く浪宕閑吟
 翠微を下る更に一法の思惟す可き無し人有り我に出
 山の意を問へば藜杖頭に破衲衣を挑ぐ天竺山に歸り
 て偈あり云く事事無能一つも前まず喜ぶ天竺に歸つ
 て殘年を過すを飢餐困睡餘事無し説くを休めよ壺中
 別に天有りと又臨終の偈數句あり廣燈に之れを載せ
 て備れり而して雲臥記談に云ふ熙寧の間僧清順とい
 ふものあり靈隱天竺に住來して偈句を以て閑中の趣
 味を陶寫して曰く前云凡そ雲臥に談ずる所は多くは古
 傳の謬を正す也其あるが如し然れども此の二偈已に
 廣燈中に收む瑩の談する所に按ぶるに一字も差ふこ
 と無し豈んど瑩の聞く所の玄順と清と未だ皎如なら
 ざるか又前偈は雁山を離るるときに作り後偈は天竺
 に歸るときに作り紀談に載する所は一時の什に似
 たり若し雲臥二偈を以て天聖の前に置かば猶或は恕
 せん況んや熙寧の間をや二事を反復するに李撰之れ
 を得たり之れを以て此れを見れば雲臥の談する所の
 諸書は恐らくは未だ然らざる處あらん

事、李撰得之、以此見之、雲臥所談之諸書、恐有未然之處。

咸平間、林和靖臥孤山、有梅花八詠、歐陽文忠公稱賞其疎影橫斜水清淺、暗香浮動月黃昏之句、山谷云、雪後園林、纔半樹、水邊籬落、忽橫枝、似勝前句、不知文忠公何緣棄此而賞彼、文章大槩亦如女色、好惡繫於人、予謂二聯美則美矣、不能無疵、客云何也、曰、橫斜之疎影、實清水之所寫也、浮動之暗香、寧昏月之所關乎、又雪後半樹者、形似也、水邊籬枝者、實事也、二聯上下二句、皆不純矣、客云、諸家詩多如此、何責之者深耶、曰、諸家皆放過一著者也、二公探林詩爲絕唱、我以其盡美矣、未盡善矣、言之耳、古今詩話曰、梅聖

咸平の間、林和靖、孤山に臥して、梅花八詠あり、歐陽文忠公、其の疎影橫斜水清淺、暗香浮動月黃昏の句を稱賞す、山谷云ふ、雪後園林、纔に半樹、水邊籬落、忽横枝は、前句よりも勝れるに似たり、知らず文忠公何に緣りて此れを棄て、而して彼を賞するや、文章は大概亦女色の如し、好悪は人に繫ると、予謂へらく、二聯は美は則ち美なり、疵無きこと能はず、客云ふ何ぞや、曰く、横斜の疎影は、實に清水の寫す所なり、浮動の暗香は、寧ぞ昏月の關する所ならんや、又、雪後の半樹は、形似なり、水邊の横枝は、事實なり、二聯上下の二句、皆純ならず、客云ふ、諸家の詩、多くは此の如し、何ぞ之れを責むることの深きや、曰く、諸家は皆一著を放過する者なり、二公は、林の詩を探りて、絶唱と爲す、我只だ其の美を盡し未だ善を盡さざるを以て之れを言ふのみ、古今詩話に曰く、梅聖俞、王維の詩を愛す、云ふあり、柳塘春水慢、花塢夕陽遲」と、善いかな夕陽遲は、則ち花に繫る、而して春水慢は、柳に繫らざるなり、杜甫の詩に云ふ、深山短景を催し、喬木高風なり易しの如きは、此れ了に瑕類無しと、是くの如き詩評は、美を盡し善を盡すと爲すなり、客曰く、雪後半樹も、亦實事を爲すべし、曰く、爾り、形似の句は好し、其事の句は卑し、

愈愛王維詩有云、柳塘春水慢、花塢夕陽遲、善矣、夕陽遲則繫花、而春水慢不繫柳也、如杜甫詩云、深山催短景、喬木易高風、此了無瑕類、如是詩評、爲盡美盡善也、客曰、雪後半樹、亦可爲實事、曰、爾、形似句好、實事句卑、讀者詳之、古人作詩、非諷則懷離、此二、不荀出口矣、舒王雨過偶書落句云、誰識浮雲知進退、纔成霖雨便歸山、是懷也、王相神宗解印之後、高臥鍾山、醉心內典、晚捐宅爲寺、半山智度寺是也、知進退之言、不爲忝矣、耳、詩之品藻甚難矣、昔王荊公謂山谷曰、古云、鳥鳴山更幽、我謂不若、不鳴山更幽、故鍾山卽事落句云、茅簷相對坐終日、一鳥不鳴山更幽、苕溪胡氏云、王文海云、鳥鳴山更幽、荊公云、一鳥不

讀む者之れを詳にせよ。

古人詩を作る、諷に非ざれば即ち懷、此の二を離れては苟も口より出さず、舒王の雨過偶書の落句に云ふ、誰か識らん浮雲の進退を知るを、纔に霖雨と成つて便ち山に歸る、とは、是れ懷なり、王、神宗に相として、印を解くの後、鍾山に高臥し、內典に心酔す、晚に宅を捐て、寺と爲す、半山の智度寺是れなり、進退を知るの言、忝と爲さず、詩の品藻甚だ難し、昔王荊公、山谷に謂ひて曰く、古に云ふ、鳥鳴いて山更に幽なり、我謂ふに、鳴かずして山更に幽なるに若かずと、故に鍾山卽事の落句に云ふ、茅簷相對して坐して日を終ふ、一鳥鳴かず山更に幽なり、苕溪の胡氏云ふ、王文海云ふ、鳥鳴いて山更に幽なり、荊公云ふ、一鳥鳴かず山更に幽なり、其の意に反して而して之れを用ふ、蓋し之れを沿襲すと、言はざるのみ、予曰く、荊

「嶺山更幽、反其意而用之、蓋不言沿襲之耳、予曰、荆公不及文海者遠矣、大凡物相兼而成奇、其奇多矣、不相兼而奇、其奇鮮矣、文海之句、即動而靜也、荆公之句、唯靜而已、其奇鮮矣、哉、苕溪爲說、其惑甚矣、只反其意而用之者可也、不言沿襲者非也、寧未有前句、而得後句乎、若有之者、不爲佳句矣、故云、詩之品藻甚難矣、

王荆公詩、披香殿上留朱轂、太液池邊送玉杯者、取柳詞大液波翻披香簾捲也、又北澗欲通南澗水、南山正遠此山雲者、取樂天東澗水流、澗水南山雲起北山雲也、又肘上柳生渾不管、眼前花發即欣然者、取白氏花發眼中猶足怪、柳生肘上亦須休也、此等類、

公は文海に及ばざること遠し、大凡物は相兼ねて而して奇を成せば、其の奇多し、相兼ねずして奇なれば、其の奇鮮し、文海の句は即ち動にして而して靜なり、荆公の句は唯だ靜のみ、其の奇鮮いかな、苕溪爲めに其の惑を説くこと甚し、只だ其の意に反して而して之れを用ふるは可なり、沿襲を言はざるは非なり、寧ろ未だ前句有らずして而して後句を得るか、若し之れ有らば、佳句と爲さず、故に云ふ、詩の品藻甚だ難しと。

王荆公の詩に、披香殿上朱轂を留め、太液池邊玉杯を送るは、柳の詞の「大液波翻り披香簾捲く」といふに取れるなり、又、北澗通せんと欲す南澗の水、南山正に遠る北山の雲といふは、樂天の「東澗の水は流る西澗の水、南山の雲は起る北山の雲」といふに取れるなり、又、肘上柳生じて渾て管せず、眼前花發いて即欣然といふは、白氏の「花眼中に發く猶怪むに足る、柳、肘上に生じて亦須らく休すべし」に取れるなり、此等の類、往々に在り、夫れ詩人の

往往在焉。夫詩人剽竊者常也。然有三竊。竊勢爲上。竊意爲中。竊詞爲下。其竊詞者。一詩中一句之一兩字耳。猶爲下也。一連雙偶。竊取。寧非下下邪。或曰。一連雙偶。實非也。恐荆公暗合耳。予曰。他人或恕焉。荆公不赦矣。王氏平居銜記覽。白家衣詩。自荆公始。柳詞。白句。常人之所口占也。王氏豈不記乎。只是荆公非狐白手之所致乎。

遯齋閑覽云。凡詠梅。多詠白。而荆公詩。獨云。鬢愁黃金危欲墮。帶圍紅蠟巧能裝。不惟造語巧麗。可謂能道人不到處矣。荆公此詩。麗則麗矣。能道人不到處者。非也。和靖詩云。帶圍紅蠟綴初乾。荆公豈不見此句耶。遯齋過稱可笑矣。

剽竊は常なり。然れども三竊あり。勢を竊むを上と爲し、意を竊むを中と爲し、詞を竊むを下と爲す。其の詞を竊むは、一詩の中一句の一兩字のみ。猶下と爲すなり。一連雙偶竝び取る。寧に下の下に非ずや。或人曰く、一連雙偶は實に非なり。恐くは荆公の暗合のみ。予曰く、他人ならば或は恕せん。荆公は赦さじ。王氏平居、百家を記覽に銜ふ。百家衣の詩は荆公より始れり。柳の詞、白の句、常人の口占する所なり。王氏豈に記せざらんや。只だ是れ荆公、狐白手の致す所に非ずや。

遯齋閑覽に云ふ、凡そ梅を詠するに、多くは白を詠す。而して荆公の詩に獨り云ふ、鬢愁黃金危うして墮ちんと欲す。帶圍紅蠟巧に能く裝ふと、惟と造語の巧麗なるのみならず、能く人の到らざる處を道ふと謂ふべしと、荆公此の詩麗は則ち麗なり、能く人の到らざる處を道ふとは非なり。和靖の詩に云ふ、帶圍紅蠟綴りて初めて乾くと、荆公豈に此の句を見ざらんや、遯齋の過稱するは笑ふべし。

靈苑集、天竺寺月中桂子詩序云、上嗣統之六祀、天聖紀號、龍集丁卯秋、七八兩月、望舒之夕、寺殿堂左右、天降靈實、其繁如雨、其大如豆、其圓如珠、其色白者、黃者、黑文者、時有帶殼者、殼味辛、識者曰、此月中桂子也、云云、詩曰、丹桂生瑤宮、千年會一時、偏從天竺落、祇恐月宮知、落句云、林間僧共拾、猶誦樂天詩、予按、起世經、閻浮樹影寫月中也、月中無桂樹、外書不知、謾造語耳、慈雲台宗偉匠、當辨明之、同俗書、作詩文記之何哉、其後明教大師、作行業記、載此事云、靈山秋霽、嘗天雨、桂子、法師乃作桂子種桂之詩、雖嵩公信之筆、之不能無疑矣。

楊誠齋曰、大抵詩之作也、興上也、賦次也、庶

辨北詩話

靈苑集に、天竺寺の月中の桂子の詩の序に云ふ、上嗣統の六祀、天聖の紀號、龍集丁卯の秋七八の兩月、望舒の夕、寺の殿堂の左右に、天、靈實を降す、其の繁きこと雨の如し、其の大き豆の如く、其の圓きこと珠の如く、其の色、白なる者、黃なる者、黑文なる者、時に殼を帶ふる者あり、殼の味辛し、識者曰く、此れ月中の桂子なり云々、詩に曰く、丹桂瑤宮を生ず、千年會一時、偏に天竺從り落つ、祇に恐る月宮に知られんことを、落句に云ふ、林間僧共に拾ふ、猶誦す樂天の詩、予按するに、起世經に、閻浮の樹影月中に寫るなり、月中に桂樹無し、外書に知らずして、謾に造語するのみ、慈雲は古宗の偉匠、當に之を辨明すべし、俗書と同じく、詩文を作りて、之れを記するは何ぞや、其の後、明教大師、行業記を作りて、此の事を載せて云ふ、靈山秋霽れて、嘗て天、桂子を雨らす、法師乃ち桂子種桂の詩を作る、嵩公之れを信じて、之れを筆すと雖、疑なきこと能はず。

楊誠齋曰く、大抵詩の作は、興は上なり、賦は次なり、庶和

和不得已也、我初無意於作是詩、而是物是事、適然觸於我、我之意亦適然感乎是物是事、觸先焉感隨焉、而是詩出焉、我何與哉、天也、斯之謂興、或觸意一花、或分題一山、指某物、課一詠、立其題、徵一篇、是已非天矣、然猶專乎我也、斯之謂賦、至於賡和、則孰觸之、孰感之、孰題之哉、人而已矣、出乎天、猶懼我乎天、專乎我、猶懼強乎我、今牽乎人而已矣、尙冀其有一銖之天、一黍之我乎、蓋我未嘗觀是物、而逆追彼之觀、我不欲用是韻、抑從彼之用、雖李杜能之乎、而李杜不爲也、是故李杜之集、無牽率之句、而元白有和韻之作、詩至和韻、而詩始大壞矣、故韓子蒼以和韻爲詩之大戒、此書佳矣、然不必皆然矣、夫詩

は已むを得ざるなり、我初め是の詩を作るに意無し、而して是の物是の事、適然として我に觸る、我の意も亦適然として是の物是の事に感ず、觸るよは先きにして、感隨ふ、而して是に詩出づ、我何と與らんや、天なり、斯れを之れ興と謂ふ、或は意を一花に觸し、或は一山を分題し、某物を指して一詠を課し、其の題を立て、一篇を徵す、是れ已に天に非ず、然れども、猶我に專なり、斯れを之れ賦と謂ふ、賡和に至りては、則ち孰か之れに觸れ、孰か之れに感じ、孰か之れに題するや、人のみ、天に出づるも、猶天を我ふを懼る、我に專なるも、猶我を強ふるを懼る、今人に牽るのみにして、尙其の一銖の天、一黍の我有るを冀はんや、蓋我未だ嘗て是の物を觀ずして、而して逆て彼の觀るを追ひ、我れ是の韻を用ふるを欲せずして、而して抑へて彼の用に從ふ、李杜と雖ども、之れを能くせんや、而して李杜は爲さざるなり、是の故に、李杜の集には、牽率の句無し、而して元白には和韻の作あり、詩は和韻に至りて、而して詩始めて大に壞れり、故に韓子蒼は和韻を以て詩の大戒と爲せり、此の書佳なり、然れども、必ずしも皆然らず、夫れ詩は志の之く所なり、性情なり、雅正なり、其の言に形るよ、が若き、或は性情なり、或は

者志之所之也、性情也、雅正也、若其形言也、或性情也、或雅正也者、雖賦和上也、或不性情也、不雅正也、雖興次也、今夫有人、端居無事、忽焉思念出焉、其思念有正焉、有邪焉、君子之者去其邪、取其正、豈以其無事忽焉之思念爲天而不分邪正隨之哉、物事之觸我也、我之感也、又有邪正、豈以其觸感之者爲天而不辨邪正而隨之哉、況詩人之者、元有性情之權、雅正之衡、不質於此、只任觸感之興、恐陷僻邪之坑、昔者仲尼以風雅之權衡、刪三千首、裁三百篇也、後人若無雅正之權衡、不可言詩矣、又李杜無和韻、元白有和韻、而詩大壞者非也、夫人有上才焉、有下才焉、李杜者上才也、李杜若有和韻、其詩又必善

正なる者は賦和と雖ども七なり、或は性情ならず、雅正ならざれば、興と雖ども、次なり、今、夫れ人あらんに、端居無事、忽焉として思念出づ、其の思念に正あり邪あり、君子は、其の邪を去りて、其の正を取る、豈に其の無事忽焉の思念を以て天と爲して、而して邪正を分たずして之れに隨はんや、物事の我に觸るゝは、我の感なり、又、邪正あり、豈に其の觸感の者を以て、天と爲して、而して邪正を辨せずして、而して之れに隨はんや、沉んや、詩人は、元と性情の權、雅正の衡あり、此に質さずして、只だ觸感の興に任せば、恐くは、僻邪の坑に陥らん、昔者、仲尼、風雅の權衡を以て、三千首を刪りて、三百篇を裁するなり、後人若し雅正の權衡無くば、詩を言ふべからず、又、李杜に和韻無く、元白に和韻有りて、而して詩大に壞るといふは、非なり、夫れ人に、上才あり、下才あり、李杜は上才なり、李杜若し和韻あらば、其の詩又必ず善からん、李杜の世に和韻無し、故に唐和の美惡見れず、元白は下才なり、始めて和韻を作れり、必ずしも、和韻にして、而して詩壞れず、只だ其の下才の爲す所なり、故に其の集中、興感の作と雖ども、皆杜李に及びず、何ぞ特り唐和に至りて之れを質めんや、夫れ上才の者は、必ず自得の處あり、其の

矣。李杜世無和韻。故廢和之美惡不見矣。元白下才也。始作和韻。不必和韻而詩壞矣。只其下才之所爲也。故其集中雖與感之作皆不及李杜。何特至廢和賁之乎。夫上才之者必有自得處。以其得處高于與也。賦也和也。無往而不自得焉。其自得之處。揚子所謂天也者也。其天也者。何特與而已乎。賦也和也。皆天也。下才之者。少自得處。只是沿襲剽掠牽合而已。是揚子之所謂大壞者也。只其下才之所爲也。寧廢和之罪哉。多金之家。作瓶盤釵釧也。瓶盤釵釧雖異。皆一金也。故其器皆美矣。多金之家。作器也。其用不足焉。雜鉛銀鉛鐵而成焉。故其器不美矣。揚子不辨上下才。謾言賦和者過矣。子蒼以和韻爲詩之

得る處を以て、與や賦や和やに寓す、往くとして而して自得せざるといふこと無し、其の自得の處は、揚子の謂はゆる天なる者なり、其の天とは何ぞや、特り與のみならんや、賦や和や皆天なり、下才の者は、自得の處少し、只だ是れ沿襲剽掠牽合するのみ、是れ揚子の謂はゆる大に壞るゝ者なり、只だ其の下才の爲す所なり、寧ぞ廢和の罪ならんや、金多き家は、瓶盤釵釧を作るなり、瓶盤釵釧異なりと雖ども、皆一金なり、故に其の器皆美なり、金寡き家の器を作るや、其の用足らず、鉛銀鉛鐵を雜へて而して成す、故に其の器美ならず、揚子、上下の才を辨ぜずして、謾に賦和を言ふは、過てり、子蒼は和韻を以て詩の大戒と爲すは、學者を激して、而して剽掠牽合を警むるのみ、恐くは、揚子の言ふ所の者に非ず。

大成者、激學者而警勦、掠奪合耳、恐非揚子之所言之者矣。

夫物不必相待而爲配、異世同調、蓋天偶也、廬山芝菴、主偈云、千峰頂上一間屋、老僧半間雲、半間昨夜雲隨風雨去、到頭不似老僧閑、楊誠齋明發漣頭詩云、黑甜偏至五更濃、強起侵曉敢小慵、輪與山雲能揜懶、日高猶宿夜來蜂、二什清奇、可以季孟之間而待矣、世所傳唐宋千家詩選、後村先生編集者、恐非也、予見後村集六十卷、絕無其事、只跋宋氏絕句詩云、余選唐人及本朝七言絕句、各得百篇、五言絕句亦如之、又云、元白絕句最多、白止取三百、元止取五言一首、又云、夫合兩朝六七百年間、冥搜精擇、僅四百首、信矣。

濟北詩話

夫れ物、必ず相待たずして而して配を爲し、世を異にして調を同うするは、蓋し天偶なり、廬山の芝菴主の偈に云ふ、千峰頂上一間の屋、老僧半間雲、半間昨夜雲は風雨に随つて去る、到頭老僧の閑なるに似かず、楊誠齋の明に漣頭を發する詩に云ふ、黑甜偏に至つて五更濃なり、強起曉を侵して敢て小慵す、山雲に輪與して能揜懶し、日高うして猶宿す夜來の蜂、二什の清奇、季孟の間を以て待つべし。

世に傳ふる所の唐宋千家詩選、後村先生の編集といふは、恐くは非ならん、予、後村集六十卷を見るに、絶えて其の事無し、只、宋氏絶句の詩に跋して云ふ、余、唐人及び本朝の七言絶句を選びて、各、百篇を得たり、五言絶句も亦之くの如し、又云ふ、元白絶句最も多し、白は止だ三百を取り、元は止だ五言一首を取る、又云ふ、夫れ兩朝を合して、六七百年の間、冥搜精擇して、僅に四百首、信なるかな、絶句の工なり難きやと、是れを以て而して言へば、劉

絶句之難工也、以是而言、劉氏之詩選、其法尤嚴、今之千家詩、其選體繁冗舛錯、豈出于後村手者邪、疑俚儒託名於劉氏手、其間詩多錯、作者名、或四韻詩、截四句、收爲絶句、凡絶句四韻、體裁各別、若分四韻作絶句、不協詩法、後生見其不協者、只信後村選、以爲法格、收詩道者不鮮矣、又朱淑真詩、其格律軟陋、而多收、何哉、雪詩、押兼字者、不成文理、我反覆詳之、劉氏欲選詩、先博採諸家、未遑精擇、而後人以其創之、漫加名氏耶。

客問、一詩兩字、病語、曰、爾曰、古人何有之乎、曰、達人不妨、曰、見賢思齊、曰、初學容恕、不得琢句、先聲有之者、達懶也、凡詩文、拘聲韻、棋字、不得佳句者、皆庸流也、作者無之、七通八

氏の詩選、其の法尤も嚴なり、今の千家詩、其の選體、繁冗舛錯、豈に後村の手に出づる者ならんや、疑ふらくは、俚儒名を劉氏の手託するならん、其の間の詩は、多くは作者の名を錯る、或は四韻の詩にして、四句を截して、收めて絶句と爲す、凡そ絶句と四韻との體裁各、別なり、若し四韻を分ちて絶句と作さば、詩法に協はず、後生、其の協はざる者を見て、各、後村の選を信じて、以て法格と爲す、詩道を敗る者鮮がらず、又、朱淑眞の詩は、其の格律軟陋にして、而して多く收むるは何ぞや、雪の詩、兼字を押する者、文理を成さず、我反覆之れを詳にするに、劉氏詩を選せんと欲し、先づ博く諸家を探りて、未だ精擇するに、遑あらずして、後人其の之れを創むるを以て、漫に名氏を加ふるか。

客問ふ、一詩兩字、病ありや、曰く、爾り、曰く、古人何ぞ之れ有るや、曰く、達人は妨げず、曰く、賢を見ては齊しからんことを思ふ、曰く、初學にして容恕せば、句を琢くことを得ず、先聲に之れ有るは、達懶なり、凡そ詩文、聲韻、複字に拘りて、佳句を得ざるは、皆庸流なり、作者には之れ無し、七通八達、若し聲韻の礙有るは、未だ作者の域に入らざ

達若有聲韻礙、可知未入作者域、然古人犯聲韻復字者、達懶也、非不能矣。

予有數童、狂游戲、誑、不好誦習、予鞭笞誨誘、使其賦詩、童曰、不知聲律、予曰、不用聲律、只排五七、童嘆愁怨、適予不怒焉、童不得已而呈句、雖蹇澁朴拙、而或不成文理、其中往往有自得醇全之趣、予常愛怪、又令學書、童曰、不知法格、予曰、不用法格、只爲臨摸、童之嘖、適予之不怒如先、不得已而呈一二紙、雖屈、蚓亂鴉、而或不成字形、其中往往有醇全之畫、予又愛怪、則喟歎曰、世之學詩書者、傷於工奇、而不至作者之域者、皆是計較之過也、今夫童孩之者、愚駭無知、而有醇全之氣者、朴質之爲也、故曰、學詩者、不知童子之醇意、

ることを知るべし、然れども、古人にして、聲韻復字を犯すは、達懶なり、能くせざるには非ず。

予に數童あり、狂游戲、誑して、誦習を好まず、予、鞭笞誨誘して、其れをして詩を賦せしむ、童曰く、聲律を知らず、予曰く、聲律を用ひず、只だ五七に排せよ、童嘆愁怨、適予、予恕せず、童已むを得ずして句を呈す、蹇澁朴拙にして、或は文理を成さずと雖ども、其の中、往々に自得醇全の趣あり、予常に愛怪す、又、書を學ばしむ、童曰く、法格を知らず、予曰く、法格を用ひず、只だ臨摸を爲せよと、童の嘖、適予の恕せざる、先の如し、已むを得ずして一二紙を呈す、屈、蚓亂鴉、而して或は字形を成さずと雖ども、其の中、往々に醇全の畫あり、予又愛怪す、則ち喟歎して曰く、世の詩書を學ぶ者は、工奇に傷れて、而して作者の域に至らざる者は、皆是れ計較の過なり、今夫れ童孩の者、愚駭無知にして、而して醇全の氣ある者は、朴質の爲なり、故に曰く、詩を學ぶ者は、童子の醇意を知らずんば、詩を言ふべからず、書を學ぶ者は、童子の醇畫を知らずんば、書を言ふべからず、特に詩書のみならず、道豈に斯れに異ならんや、學者先づ醇全の意を立て、輔るに脩練の力を

不可言詩矣。學書者不知童子之醇畫不可言書矣。不特詩書焉。道豈異於斯乎。學者先立醇全之意。輔以修練之功。爲易至耳。

以てせば、至り易しと爲すのみ。